

横浜山手病院について 46. 閑話編：荻野吟子 (10)

うちだ かずひで
内田 和秀

(受付：平成 29 年 12 月 4 日)

索引用語

松野菊太郎, M. C. ハリス, サンフランシスコ・リバイバル, 河辺貞吉, J. C. ブランド

はじめに

前稿において言及した進徳社およびその発起人と生徒 1 名に引き続き、本稿ではいま 1 人の進徳社生徒、松野菊太郎について述べる。

松野菊太郎の略年譜 (1)

彼の略年譜を表 1 に示す¹⁾²⁾。本文では重複を避けるため、表 1 のいくつかの事項について解説する。

菊太郎が洗礼を受けたハリスは、米国メソジスト監督教会日本年会監督の Merriman Colbert Harris (1846 年 7 月 9 日-1921 年 5 月 8 日) である²⁾。1878

年 6 月 2 日、彼は内村鑑三 (本シリーズ 32 参照)、新渡戸稲造 (1862 年 9 月 1 日-1933 年 10 月 15 日)、宮部金吾 (本シリーズ 26) ら、札幌農学校第 2 期生に授洗した²⁾。なお、新井奥彦が師事した T. L. Harris (本シリーズ 25) とは無関係である。

宗教用語として用いられるリバイバル／リヴァイヴァルは、信仰復興／信仰覚醒と訳され、主にプロテスタントの福音派で使用される。それは聖霊により生じる急激で広範な信仰の活性化現象と定義される²⁻⁷⁾。対象は個人に限定されておらず、教会や教区における教勢の増大も含まれる。ゆえに、信仰から離れていた信者が再び信仰に戻ることのみならず、

表 1 松野菊太郎の略年譜

時 期	出 来 事	時 期	出 来 事
1868年2月16日	甲斐国八代郡下曾根村(現山梨県甲府市下曾根町)に誕生	1895年11月	甲府浸礼教会を組織
1879年9月	私塾進徳社で矢野道雄に学ぶ	1896年6月	ブランドが東京に戻る
1881年12月	道雄を追って上京するが、師の病気により間もなく帰郷 甲府の新聞社「峡中日報」の記者になる	1899年9月	水戸伝道中のブランドに招かれる
1883年	再び上京 道雄の紹介で松本荻江の学僕となる	1900年1月	東京へ移転
1884年	秋田県女子師範学校の教頭として赴任した荻江に従い秋田県に移転	1900年3月	妻と渡米 シカゴで日本人伝道
1884年11月	帰郷	1902年4月	ニューヨークのブルックリン・ミッションで福音会を経営
1885年	東京商業学校(現一橋大学)に入学	1902年	寄宿生に生江孝之、星一らがいた
1888年	眼病のため勉学に支障 渡米のため退学	1903年	帰国
1888年7月	横浜出港 サンフランシスコで福音会に下宿	1903年10月	フレデリック・フランソンの来日時、通訳を務める
1889年7月7日	サンフランシスコのメソジスト教会でハリスより受洗	1903年10月	東京伝道学校の教授兼幹事に就任
1889年8月上旬頃	サンフランシスコ・リバイバル	1906年2月	霊南坂教会の副牧師に就任
1893年4月	ハワイ伝道 教会再興	1907年6月	麻布クリスチャン教会の第3代牧師に就任
1893年9月	米国で按手礼 牧師となり再びハワイへ	1909年1月3日	報恩会設立
1894年4月末	故国伝道のために帰国	1912年頃	聖書之友が発行した雑誌の主筆に就任
1894年6月	芝区桜田本郷町(現港区西新橋1丁目3番と新橋1丁目8番の各南半)で同志と共同生活	1912年頃	世界教会会議出席のため、横浜出港
	これらの集団を「小さき群」と呼んだ	1919年5月	米国、英国、フランス、スイスを歴訪(8ヶ月間)
	J. C. ブランドの通訳になる	1924年9月	千葉県の大吠崎に報恩会の休養所を設立
1895年	経済的破綻により「小さき群」は解散	1927年春	井上伊之助の高砂旗伝道を後援
1895年4月3日	中功急いと結婚 甲府伝道	1929年6月	デファイアンス・カレッジより名誉博士号(神学)を授与
1895年10月	ブランドが甲府着任	1930年4月	組合教会とクリスチャン教会の合併
		1938年12月9日	妻急死、直腸がんで死去
		1940年1月	報恩会と信愛会の合併 理事長就任
		1944年3月31日	牧師辞任
		1952年1月25日	病没

未信者の入信もこれに含まれる。一般的にリバイバルとリバイバル運動が混同されている。しかし後者における「運動」は、リバイバルを目的とした人為的活動を意味するので、前者の定義を逸脱する。概念の異なる両者を区別することが、妥当であるものと考えられる。

サンフランシスコに滞在していた日本人の間に生じたリバイバルを、サンフランシスコ・リバイバルと呼んでいる。その時期に関しては、1890年説⁸⁹⁾と1889年説¹⁰⁾¹¹⁾がある。前者の根拠は菊太郎の回想¹⁾に基づくものと考えられる。それにおいてリバイバルは、入信1年後の1891年に生じたとする意味のことが記述されているが、同資料¹⁾において菊太郎が受洗したのは1889年7月7日と精密に記載されているので、両資料⁸⁹⁾で正しくは1890年と理解された。後者の根拠は不明であるが、別の資料を用いて考察する。後に日本自由メソジスト教会の牧師に就任した河辺貞吉(1864年7月29日-1953年1月17日)²⁾の著書を根拠とした資料¹²⁾によれば、1889年7月末頃の話として、東ヶ崎菊松が聖霊を受けたことを、丹森太郎、ハリス、貞吉らの前で語り、同年8月7日19時頃に貞吉も聖霊を受け、これらがサンフランシスコ・リバイバルの開始であったと主張している。また、菊松の自伝を典拠とした資料¹³⁾では、1889年7月終わりの夜に眠れず、真夜中に山に登って祈ったが魂の平安は得られなかった。しかしある日の15時頃にヨハネ福音書の一節を読み、電気に打たれて空中に突き飛ばされたようになったと書かれている。これより厳密な時期は不明であるものの、貞吉の主張と大差はない。菊太郎の主張を否定する確固たる証拠はないが、本稿では当事者らの具体的主張とその一致より、後者の1889年説を支持する。

「小さき群」と命名された伝道集団については、解散時期や会員に諸説があり、別の機会に詳述する予定である。

1890年2月に来日したブランド(James Cassie Brand: 1848年9月6日-1921年2月23日)²⁾は、米国バプテスト教会宣教師である。25年間、日本語を学ばずに通訳を付けて説教を行った。

生江孝之(1867年12月7日-1957年8月11日)²⁾は、牧師、社会事業家および日本女子大学教授として働いた。

星一(1873年12月25日-1951年1月19日)¹⁴⁾は、

モルヒネの国産化に成功した星製薬および星製薬産業(現星薬科大学)の創立者であり、政治家でもあった。

スカジナビアン・アライアンス・ミッションの創立者であるFredrik Franson(1852年6月17日-1908年8月2日)¹⁵⁾は、3回来日している(本シリーズ33)。初回が1894年10月で、同年12月には上海に上陸し、短期滞在後に再来日している(時期不明)。3回目は1903年3月中旬である。

おわりに

本報において進徳社生徒の1人、松野菊太郎の生涯を簡略的に示した。次報でも引き続き菊太郎について言及する。

文 献

- 1) 松野菊太郎伝編集委員会編。松野菊太郎，初版，松野菊太郎伝刊行会，東京，1959: 1-161, 346-352.
- 2) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編。日本キリスト教歴史大事典，初版，教文館，東京，1988: 176, 339, 1004, 1030, 1141-1142, 1241, 1374, 1493.
- 3) キリスト教大事典編集委員会編。キリスト教大事典，改訂11版，教文館，東京，1995: 1135.
- 4) 大貫隆編。岩波キリスト教辞典，初版，岩波書店，東京，2002: 1192-1194.
- 5) 比屋根安定編。新・キリスト教辞典，初版，誠信書房，東京，1965: 417.
- 6) 八木谷淳子。なんでもわかるキリスト教大事典，初版，朝日新聞出版，東京，2012: 371.
- 7) 村松明編。大辞林，第3版，三省堂，東京，2006: 2667.
- 8) 高橋昌郎編。日本プロテスタント史の諸相，初版，聖学院大学出版会，上尾，1995: 233-254.
- 9) 聖ヶ丘教会100周年記念誌委員会編。聖ヶ丘教会百年史，初版，聖ヶ丘教会100周年記念誌委員会，東京，1989: 43.
- 10) 同志社大学人文科学研究部編。北米日本人キリスト教運動史，初版，PMC出版，東京，1991: 176-179.
- 11) 佐々木敏二編。日本人カナダ移民史，初版，不二出版，東京，1999: 118.
- 12) 北加基督教教会同盟編。開教八十年史，初版，

- 北加基督教教会同盟, サンフランシスコ, 1957: 23-25.
- 13) 藤尾正人. ブランドさんとその群れ I, 初版, 同信社, 東京, 1984: 146-154.
- 14) 講談社出版研究所編. 講談社日本人名大辞典, 初版, 講談社, 東京, 2001: 1684.
- 15) O. C. グラウァー. 燃えて輝く光, 初版, 日本同盟キリスト教団出版部, 東京, 1977: 11-277.